

緒言

奈良にある文化財の価値はひじょうに大きい。こんなことはいまさらいうまでもないことであるが、奈良にある諸々の文化財をすこし詳しく調べてみると、それが見た眼はほんのちよつとしたようなものでも、その本質にはわが国文化の真髓に通ずるようなものが多く、またその出来栄えにもまことに洗練された美しさをもつたものが多い。それは何んといつてもこの奈良が他の地方とは異つて、ここに飛鳥の昔から各時代を通じて、常にわが国文化の中心があつたからだといわなければならない。この文化の中心とは、わが国として最初に営まれた都すなわち飛鳥京とその周辺の諸名刹であり、また世界に名だたる都制を完備した平城京とその京内所々に建てられた南都七大寺であつたことは、世人のよく熟知するところであろう。ことにこの南都七大寺は平城京がなくなつた後までも、よくわが国仏教文化の中心的な位置を堅持していたのであるから、そこに育まれた諸々の文化には、ひじょうにすぐれた要素を多分にもつていて、これがいまの奈良の文化財として、わたくし達の眼前にそのすばらしさを示しているのである。

奈良国立文化財研究所ではこうした奈良の文化財を主として調査し研究しつづけているのであるが、それはまつたく地味な、そして一向に映えない仕事の連続で、しかもその調査の時期といえ、たいいていそれ等の寺院でもつとも参詣のすくない酷暑の夏とか厳寒の冬とかのことであり、またその調査対象になるものがあるいは天井の裏とか、あるいは須弥壇の下とかから引き出さなければならぬようなものであるから、それには寺側と事前によほどよく連絡した上でないと、容易に手をつけられないというのが常である。しかしこんな調査こそ現地の研究所のしなければならぬ仕事であるから、敢てこの研究所では毎年こんなことを繰り返しているわけである。その本年度の分はまたこの年報を見ていただきたいと思う。

昭和三十七年三月

小林

剛